

水俣の猫をめぐる記憶

| | |
|-----|---|
| 著者 | 小林 直毅 |
| 出版者 | 法政大学社会学部学会 |
| 雑誌名 | 社会志林 |
| 巻 | 67 |
| 号 | 4 |
| ページ | 69-95 |
| 発行年 | 2021-03 |
| URL | http://doi.org/10.15002/00024184 |

水俣の猫をめぐる記憶

小 林 直 毅

1. 「記録としてのモノ」になった「ネコ実験の小屋」

水俣病歴史考証館の一隅に古びた小屋が展示されている。小屋といっても犬小屋よりは大きい人間が入るには小さく、金網が張られているので、動物が飼育されていたであろうといった察しはつく。かたわらのプレートには「ネコ実験の小屋」と書かれ、1950年代後半にチッソ附属病院で行われていた、水俣病にかんするネコを使った動物実験が簡潔に説明されている。そこには、チッソ水俣工場の排水を餌に混ぜて食べさせた「ネコ400号」実験の記述もある。この「ネコ実験の小屋」と名づけられた展示物は、水俣病事件のどのような記憶を想起させる「記録としてのモノ」なのだろうか（画像1）。

水俣病の原因がチッソ水俣工場の排水であることは、水俣病「公式確認」の1956年以降、比較的早い時期から各方面で指摘されていた。しかし、当のチッソは、排水に含まれる何が水俣病の病因物質なのか科学的に解明されていないといった「反論」を展開し、工場排水が原因であると認め



【画像1】水俣病歴史考証館に展示されている「ネコ実験の小屋」
(2016年3月筆者撮影)

ようとはしなかった。そればかりか、安全性が疑われている排水を垂れ流しながら水俣工場の操業をつづけ、国も熊本県も規制を怠った。そうしたなかで、チッソ附属病院では、工場排水は原因ではないという「反論」の材料を準備するための動物実験が行われていたのである。

熊本大学医学部水俣病研究班は、水俣病の病因物質は有機水銀であるとする「有機水銀説」を1959年7月に発表する。これは、チッソ水俣工場の排水が水俣病の原因であることを決定的にするものだった。しかし、それでもなおチッソは、水俣工場で用いているのは無機水銀であって、それが有機化する機序が明らかにされていないと「反論」する。当時のチッソ社長の吉岡喜一は、こうした主張をテレビカメラの前で公然と語ってさえた。

そのような状況下で、チッソ附属病院長の細川一は、水俣工場の排水を餌に混ぜて猫に与える「ネコ400号実験」を1959年7月に始めた。ネコ400号は同年10月に水俣病を発症する。この結果は、病因物質がどうあれ、チッソ水俣工場の排水が水俣病の原因であることを決定づけるものだった。ところが、チッソはこの実験結果を隠蔽する。

展示されている「ネコ実験の小屋」で、ネコ400号の飼育と実験が行われていたのかどうかは定かではない。しかしこの小屋が、60年以上前には、チッソ附属病院の動物実験施設にあったことはたしかである。「かつて」、「そこ」では、水俣工場の排水は水俣病の原因ではないと「反論」するための動物実験が行われていた。その実験ネコが飼育されていた小屋が、60年以上の時間を隔てて「いま」、水俣病歴史考証館の展示物となって「ここ」にある。こうした来歴こそが、この古びた小屋を「記録としてのモノ」にするのだ。そして、この小屋が「記録としてのモノ」となって想起させるのは、チッソが行っていた動物実験の記憶なのである。

もとより、動物実験施設のネコの飼育小屋など、写真のように出来事を記録し、記憶を想起させる技術でもなければ、制度でもない。ところが、そのような事物が史資料のひとつとなって展示されている。「いま」、「ここ」にある「ネコ実験」の小屋には、多かれ少なかれ「これは、何か」といった問いが向けられるだろう。それは、事物がある「いま」と「ここ」と、同じ事物があった「かつて」と「そこ」との間に時間的、空間的隔たりがあるからだ。この容易には埋めがたい隔たりが、否応なく「これは、何か」という問いを喚起する。それに端的に応じてくれるのが、展示物の来歴である。「ネコ実験の小屋」に付されたプレートの文章がこの事物の来歴を説明していることはいうまでもない。容易に記録にはなりえない事物が「記録としてのモノ」になり、何かしらの記憶を想起するようになるには、当の事物の来歴に多くを負わなければならないのである。

2. 「ネコ400号実験」の記憶と「会社の人間」

有機水銀副生は知られていた

「ネコ実験の小屋」を起点にして、「水俣」の記録を読み解いていくと、いくつもの重要な「水俣」の記憶が想起され、さまざまな思考が重ねられていく。それは、「ネコ実験の小屋」を見るという「水俣」の体験を思想化していく試みのひとつであるだろう。こうした体験の思想化を可能に

する史資料として、テレビドキュメンタリーとそのアーカイブもまた大きな役割を果たすはずである。

NHKの『奇病のかげに』が1959年11月に放送されて以来、水俣病事件にかんする数多くのドキュメンタリー番組が制作、放送されてきた。そのなかで、「ネコ400号実験」の記録となりうる番組は必ずしも多くない。しかし、「戦後50年」にあたる1995年に企画、制作された「NHKスペシャル 戦後50年 その時日本は」のシリーズの第4回、『チッソ・水俣 工場技術者たちの告白』（以下、『工場技術者たちの告白』）は注目に値する。この番組は、水俣病「公式確認」後約40年の歴史を経て、チッソの技術者、経営者、あるいは官僚たちがようやく口にした証言によって構成されているからである。

「ネコ400号実験」の記録と記憶としての『工場技術者たちの告白』に注目して、テレビドキュメンタリー・アーカイブによってこの番組を「いま」、「ここ」に召喚してみよう。すると、「ネコ400号実験」に至るまでに、すでにチッソが歩み始めていた加害原因企業としての歴史を記録し、その記憶を想起させる映像と音声の流れが現れる。それらは、工場排水が水俣病の原因であることも、排水に有機水銀が含まれていることも、チッソは十分に知りえていたことを明らかにする技術者たちの証言にはかならない。

水俣工場には、「ネコ400号実験」よりもはるかに以前から、チッソが水俣病の加害原因企業になっていくことを危惧していた技術者がたしかにいたのだ。「ネコ400号実験」という出来事だけが、チッソを水俣病事件の加害原因企業として決定づけたわけではない。むしろ、チッソの加害原因企業としての歴史を象徴する出来事のひとつが「ネコ400号実験」であったとも考えられるのである。

なかでも、熊大の有機水銀説の発表や「ネコ400号実験」の9年も前の1950年に、工場技術部の実験を担当した技術者、塩出忠次の証言には驚かされる。彼の実験では、当時すでに、水俣工場のアセトアルデヒド生産工程で有機水銀が副生し、それを含む母液が発泡して溢れ出ることが確認されていたのである。翌年に設備を改良した際、装置から溢れた母液が排水口に流出するのを目の当たりにした塩出は、設備の大幅な改善策を提案していた。

ところが、チッソはこれを放置したまま生産を進め、排水を海に流しつづけた。熊大研究班の有機水銀説は正しいと確信した塩出は、『工場技術者たちの告白』のなかでつぎのように証言している。「とにかく、私自身は、有機水銀説が飛び出して、会社が反論しているのは非常にまずい、まずい（と感じた）。長い時間が経過してもなお、あたかも「いま」、会社の「反論」に接したかのように彼は顔をしかめ、「まずい」という言葉の語気を強めてこう証言するのだった。

塩出の報告を受けて、「本当かい、有機水銀というものが、母液のなかに本当に出るの」と応じたのは、当時の酢酸課長、中村克己である。彼のつぎのような証言は、加害原因企業となっていくチッソの経営者や技術者の間で支配的であった考えを如実に物語るものといえる。

自分のところからの廃液が、水俣病の原因になっているということは考えたくないわけです。そうあってほしくないわけです。お前たちは、とにかく製造の方にエネルギーを注いでくれと。

こういうような方向だったものですから、ついそれに甘えて、そういうような態度、自分に都合のいい方の情報を取り入れたいと。

他方、塩出は、1959年当時の工場内の状況を振り返りながら、チッソが、いわば確信犯的に加害原因企業となっていた経緯をつぎように語っている。

私が余計なことをいっても、有機水銀説が出たときに、それを真剣にとらえてくれればよかったわけですよ。対策委員の関係者にも、それとなく、私自身は、有機水銀説は正しいと思いますということを話したわけですけどね、もう耳を貸してくれる人はだれもいなかったですね。

熊大研究班の有機水銀説は、水俣病の原因を明らかにするというよりは、むしろ病因物質の解明を目指し、それを有機水銀と特定するものだった。塩出は、この有機水銀説が発表されるより約10年も前に、アセトアルデヒドの生産工程で有機水銀が副生し、母液に混じって海に流出していることを確認していたのである。ところが、チッソは、病因物質として指摘された有機水銀の発生機序が明らかにされていないと主張して公然と「反論」する。熊大の有機水銀説発表後の1959年11月に放送された『奇病のかげに』のなかで、当時の社長の吉岡喜一はカメラに正対して、表情ひとつ変えずにつぎのように語った。

医学のほうでは、魚介の体内にある、ある種の有機水銀が原因だといっておられますが、私の方の工場から出ますのは無機水銀であり、無機水銀がどうして、どういう経路で、何によって有機水銀に化するか、こういうことはいまだに究明されていない次第でございます。

チッソ水俣工場の技術者として、生産工程での有機水銀の副生も、それが海に流れ出ていることも確認し、設備の改修まで提案していたのが塩出である。だからこそ彼は、チッソのこうした「反論」を「非常にまずい」と感じたのだろう。彼の苦い記憶は、長い時間が経過してもなお想起され、それが、顔をしかめ、語気を強める映像と音声となって表象されているのだ。テレビドキュメンタリー・アーカイブは、こうした塩出の映像と音声の流れと、吉岡の映像と音声の流れを相互に対照させたり、接続させたりしてくれる。そこでは、「ネコ400号実験」よりもはるかにさかのぼって、チッソが加害原因企業になっていく歴史が表象され、記録されつづけることになる。

「会社の人間」という主体

水俣病歴史考証館に展示され、「記録としてのモノ」となった「ネコ実験の小屋」を見る。そして、「ネコ実験」とは何だったのかを問う。このような体験から、どのような「水俣」の記憶が想起され、水俣病事件の何が、どのように語られ、描かれ、考えられていくのか。さらに考察を重ねてみよう。水俣病事件研究の成果を読み解いてみると、「ネコ400号実験」は、事件史上の重要な

出来事のひとつであったことがよく分かる。宮澤信雄『水俣病事件四十年』（宮澤 1997）では、数多くの証言、関係者のメモなどが詳細に検証されている。そこでは、「ネコ400号実験」の経過と結果、それが隠蔽されていく過程が生々しい。

この実験が細川一の手で始められたのは、熊大の有機水銀説が発表される直前だった。宮澤は、細川が「有機水銀説を聞く前に実験にとりかかることで、気持ちを整理したかったのではないか」と推測する。実験は、実験主任の小島照和医師にも知らせず、秘密実験として行われた。「会社に不利な結果が出るのが予想される」ので、「責任はすべて細川が自分で負うつもり」だったからだ（宮澤 1997 : 217）。

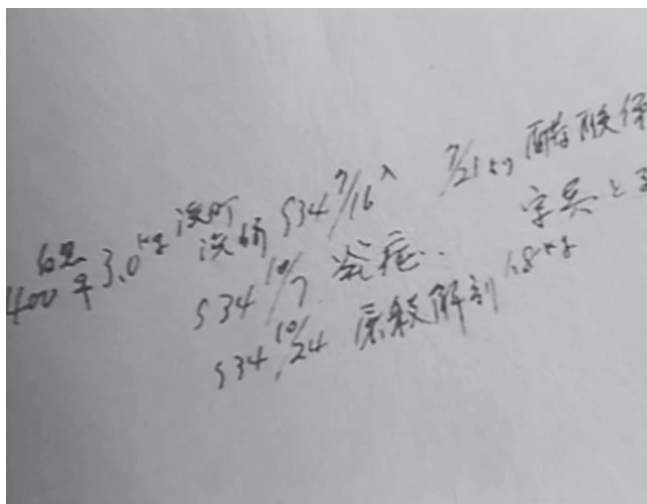
ネコ400号の水俣病発症は、当時の市川正技術部次長に報告された。しかし、市川は「ただ一例の発症では確かと言えない」、つまり再現性が確かめられていないという理由で、この重大な結果を公表しなかった。市川は細川にたいして、実験の継続を条件に「ネコ400号実験」の結果を公表しないことを説得したのである（同上 236-238）。こうした経緯を宮澤はつぎのように述べている。『「再現性はまだ確かめてはいないが、猫が一匹、アセトアルデヒド廃水で水俣病の症状を発した』と、ありのまま公表すべきであり、そうすることが本当の科学者のモラルのはずだ。この時細川は、会社の人間・市川の科学の論理をかりた説得に負けて、医師・科学者から会社の人間になったのである』（同上 238）。

とはいえ、のちの熊本水俣病第一次訴訟の臨床尋問での細川の悔恨の証言を、宮澤は見逃してはいない。『「あとから考えると、あの一例を発表してよかったんだと思う』。いったん会社の人間になったことで深く傷つき、悩みつづけた細川は、死を目前にした臨床尋問で再び医師・科学者に立ち戻ったのである』（同上 239）。

水俣病事件史上このような重要な意味をもつ「ネコ400号実験」は、テレビドキュメンタリーではどのように描かれ、語られているだろうか。『工場技術者たちの告白』では、塩出や中村の証言につづく場面で「ネコ400号実験」が取り上げられている。それは、「この頃、チッソ附属病院では、別の角度から密かに核心に迫る実験が行われていました」というナレーションで始まる。病因物質が何であれ、水俣病の原因はそもそも工場排水ではないのかという疑問から、それを確かめようとしたのが「ネコ400号実験」だった。ナレーションのいう「別の角度から密かに核心に迫る実験」とは、チッソに「反論」の余地を与えるような病因物質の解明を目指すのではなく、工場排水そのものが原因であるか否かを解明しようとする実験を意味している。

『工場技術者たちの告白』が制作、放送された1995年には、細川はすでに故人となっていた。証言しているのは、当時のチッソ附属病院の実験主任であった小島照和医師、そして細川がネコ400号の水俣病発症を報告した当時の技術部次長、市川正である。病院で行われた838匹のネコの実験の経過と結果がすべて記載された、分厚い「ネコ台帳」の映像が現れる。それにつづけて、小島はつぎのように証言した。

朝、行って、挨拶しますね、飼育係の人と。そして、このドンコ帳（「ネコ台帳」）を見て、



【画像2】「ネコ400号実験」の記録
(NHK『チッソ・水俣 工場技術者たちの告白』より)

「どんなんか」とか、いろいろ見ます。そしたら、「400号」と書いて、「係排水」とだけ書いてあるんですね。だから、「これは、どうしたんか」と聞いたんです。

これは、「ネコ400号実験」が、小島も知らないところで細川が行った秘密実験であったことを裏づける証言にはかならない。排水を与え始めたのが7月21日で、10月7日にネコ400号が異常な症状を示したとナレーションが説明する間、「ネコ台帳」の記載が映像となって流れていく。「S34 10/7 発症」という記載がクローズアップになる（画像2）。さらに、「間代性痙攣」、「跳躍運動」といったネコ400号の症状を記した文字の映像が現れる。

小島は台帳の記載を見ながら、「失調、ヨタヨタするわけですね。やっぱり震えがあるわけです。震顫。元気はないし、それから痙攣がきましてね、1回きましたか」と証言していく。そしてナレーションは、痙攣するネコの映像に重ねて、「400号の症状は水俣病によく似ていました。細川医師と小島医師は、アセトアルデヒドの排水への疑いを強めました」と語った。

細川からネコ400号水俣病発症の報告を受けた市川は、当時の経緯を振り返りながら淡々と証言していく。その内容は、宮澤の著作が明らかにしたとおりである。ナレーションが、実験の継続を条件にネコ400号の結果を公表しないという市川の提案を細川が受け入れた「この瞬間、ネコ400号は（チッソの）反論書から外されることが決まりました」と語る。これがのちに「水俣病隠し」といわれていることを、市川は「それは間違っていると思いました」と、表情も変えずに明言した。彼は、会社が都合が悪いからネコ400号の実験結果を反論書から外したという噂が流れたが、それはまったく違うという。そして、「私と細川さんの意志で、むしろ私の意志だったかも知れませんが、（反論書から）外した」と証言する。市川は、その判断は「正しかったと思う」、なぜなら、「一例でもって判断するのは危険ですから」と語った。これにたいして、細川と約束したネコ実験

がつづけられていた間の心境を語る言葉は無防備なまでに率直である。

いざ、会社関係の実験をやろうとすればですね、手が震えて、結果を知るのが恐ろしいぐらいの、そういう気持ちで、会社でないことを祈りながら、実験をやったもので、これはもう、やった人間でないと分からないぐらいのものだろうと思うんです。

継続された実験では、アセトアルデヒド工程の排水を投与したネコ9匹のうち、7匹が異常を示したが、症状はネコ400号ほどに激しくはなかった。細川もそれを水俣病とは断定しなかった。そのときの心境も、市川はやはり率直に語っている。

私は会社の人間ですから、仕事と会社の間に入って、非常に悩みましたね。いま考えれば、私はそのとき、とにかくほっとしたわけですからね、ほっとしたこの気持ちが嬉しくてですね、3回目（の実験）をやる気持ちはなかったわけなんです。

しかし、この実験で細川が水俣病と断定しなかったネコも、解剖によって、水俣病であったことがのちに明らかにされている。「ネコ400号実験」、それにつづく工場排水をネコに与える同様の実験の結果は、水俣工場の排水こそが水俣病の原因であることを立証するものであった。と同時に、脳神経細胞の脱落消失、萎縮変性が確認された病理所見は、「水俣病ネコの所見そのもの」（原田1972: 54）でもあった。すなわち、「排水を直接与えて有機水銀中毒が起こったことは、排水のなかに有機水銀そのものが含まれていたという、重大な事実を示す」（同上 55）ものだったのだ。

こうした「ネコ400号実験」の結果の意味を、原田正純は明解に説明する。「無機水銀がどうして有機化するかとか、有機水銀中のどの物質が脳神経細胞を冒すかなどという学問上の未解決の問題は、考えてみれば公害に対する企業の責任の問題とは別個のものである。疫学的に、工場排水に起因する中毒であることがわかれば企業の責任の立証はそれで十分なのである」（同上）。また、一例で判断するのは危険だから実験結果を公表しないと市川の「科学の論理」に現れるような問題を、原田はつぎのように批判する。

医学的研究においては未解決の点はずねに残るし、ある事実が九九％確実であっても、1％の疑問が残れば、研究者の態度としては、その1％に取り組まなければならないものである。しかしその1％の未知の部分が、責任を取らない企業の、あるいは行政の口実になってはならない。未解決の問題がはっきりするまでその責任をとらないというやり口は、被害をさらに拡大させる（同上）。

宮澤は、「科学の論理」を借りて「ネコ400号実験」の結果の公表を抑えこんだ市川を「会社の人間」と規定した。原田によれば、それは未知の部分をもって責任をとらない口実にする「会社の

人間」ということになる。いみじくも、市川自身も「会社の人間」と自己規定している。彼は、水俣病の原因者が会社でないことを祈りながら実験を進めたとさえ語る。市川だけではなく、有機水銀副生の報告を受けた中村もまた、会社が水俣病の原因企業とは考えたくない、そうあってほしくなかったという。このような願望に依拠して、技術者や医師が明らかにした実験結果を無視したり、歪曲したり、隠蔽したりするのが「会社の人間」なのだ。ここに水俣病事件の、ひとつの核心があるといっても過言ではない。

たしかに、このような「会社の人間」を非難するのは容易い。しかし、みずからがその成員である企業、地域社会、あるいは国家が、未曾有の災禍の加害者、原因者であってほしくないと思うのは、「会社の人間」だけだったのだろうか。会社は原因者でも、加害者でもないと言ろうとする言説の臣下（subject）となり、そのような言説実践の主体（subject）となって産出されたのは、「会社の人間」だけだったのだろうか。

経済発展と「豊かさ」を理念として語り、生産に励む企業、地域社会、国家を称揚する言説が臆面もなく編制され、「豊かさ」の追求が共有された信念にさえなっていたのが高度経済成長の歴史であった。それは、今日もなお「奇跡の経済成長」などといわれ、郷愁と懷古を込めて語られ、神話化されることすら少なくない。そのような言説実践が、みずからの臣下たる「会社の人間」と名指しする数多くの主体を、今日もなお産出しつづけているのである。だからこそ、「会社の人間」は、内心に一瞬の悔恨があったにせよ、証言する表情も、語気も淡々として冷静でありつづけられるのだろう。

3. 「ネコ400号実験」から臨床尋問へ

何が医師の良心を貫かせたのか

一度は「会社の人間」になりながらも、みずからの死を目にした熊本水俣病第一次訴訟の臨床尋問で医師、科学者に立ち戻ったといわれる細川一。彼は、この出来事だけではなく、水俣病事件史の、とりわけ初期段階の重要な局面で大きな役割を果たしてきた。チッソ附属病院長の彼から水俣保健所長への「原因不明の奇病患者発生」という1956年5月1日の報告が、水俣病「公式確認」とされている。以来、この日を起点として水俣病事件史を考えることが多い。

「公式確認」後、細川は、水俣市内の総合病院のひとつであるチッソ附属病院の医師として、つぎつぎに発生する水俣病患者の診療をつづけた。この間、水俣病の原因のひとつが、有毒化した魚介類の摂食であることが明らかになった。さらにチッソ水俣工場の排水が魚介類を有毒化させているという、もうひとつの原因も指摘されるようになった。医師、科学者であると同時に、地域で「会社病院」ともよばれる病院の医師としては「会社の人間」でもあった細川にとって、患者の診療にも、原因の究明にも強い葛藤があったことは想像に難くない。その葛藤ゆえに、「会社に不利な結果が出ることが予想され」た「ネコ実験400号実験」は、ひとり細川だけによる秘密実験として行われたのだろう。

「ネコ400号実験」ののち、細川は1962年に退職し、愛媛県大洲市に帰郷して医師をつづけた。そこで、1965年に確認された新潟水俣病の報に接した彼は、新潟に赴いて患者を診察し、その症状が水俣病であることを確認している。水俣を去っても細川は、第二水俣病ともいわれる新潟水俣病の患者を診つづけていたのである。

そうした彼のもとに、1967年6月に提起された新潟水俣病第一次訴訟の原告弁護団幹事長の坂東克彦が裁判記録を送りつづけていた。宇井純に「細川は水俣病裁判で重要な証人になる」と聞かされていたからである（坂東 2005: 157）。坂東は、新潟水俣病に2年遅れて1969年6月に提起された熊本水俣病第一次訴訟でも原告弁護団の一員であった。その坂東が、水俣病患者の支援をつづけていた石牟礼道子から、愛媛の「細川宅に立ち寄り、ネコ実験にかかわるノートの存在と、その内容を確認するよう頼まれた」（同上）のである。彼は、石牟礼の要請に応じて、熊本水俣病第一次訴訟の提起に先立つ4月末に四国の細川を訪ね、実験ノートを確認し、一部を写真に撮り、「ネコ400号実験」の経緯を聞き取った（同上 157-158）。

「会社は“工場の医師は工場のために働かなくてはならない。工場の役に立たなければならない”と言う。しかし私は違う。医師としての良心を貫きたかった」（同上 157）。細川は坂東にこう語って裁判での証言を了承した。

ところが、訴訟提起の翌1970年の5月に、細川は末期の肺ガンで入院し、法廷での証言ができなくなってしまう。「ネコ400号実験」をめぐる細川の証言は、1970年7月4日、彼が入院していた東京の癌研究所付属病院で、原告被告双方の代理人弁護士、裁判官、速記官が立ち会う臨床尋問として行われた。坂東の尋問に細川は、工場排水を投与したネコ400号の水俣病発症を彼自身が工場技術部に報告し、技術部はこの実験結果を知っていたと証言したのである。

臨床尋問から3か月が経った1970年10月9日、細川の夫人は坂東につぎのように語った。「証言していた時の主人はすごく元気で生き生きとしていました。そうですね。自分でやったことでも。主人は“自分で点数をつければ、一〇〇点満点だった。坂東さんに聞いてもらってよかった”と言っておりました」（同上 159）。この4日後の10月13日、細川は69歳で亡くなった。

裁判で被告チッソは、「水俣工場の排水に有機水銀が含まれていることを当時は知らなかった」と主張する。これにたいして原告側には、チッソの主張を覆すだけの水俣工場の内部事情や化学工場の生産工程に精通した有力な証人も証拠も十分ではない。そうしたなかで、細川の証言は決定的に重要なものとなった。

熊本水俣病第一次訴訟は、1973年3月20日に原告全面勝訴の判決が熊本地裁で下された。チッソは控訴を断念したため、この判決が確定する。判決で注目されるのは、患者と家族を長年縛りつけてきた「見舞金契約」が、「公序良俗に反する」として無効を宣告されたことである。

「見舞金契約」とは、1959年12月30日に、チッソが患者の困窮につけこんで締結させた金銭の支払い契約である。これには、チッソの好意によって死亡患者に弔慰金30万円、生存患者には年金10万円を支払うと定められていた。そのような「見舞金契約」には、患者と家族を愚弄したかのような低額の金銭の支払いだけにはとどまらない重大な問題が含まれていた。ひとつは、チッソが

加害責任も補償責任も認めないまま金銭を支払う、文字どおりの見舞金の支払い契約であったことである。もうひとつは、第5条に、「乙（患者と家族）は将来水俣病が工場排水に起因することが決定した場合においても新たな補償金の要求は一切行わないものとする」という条件が付されていたことである。

ネコ400号の水俣病発症は、細川から水俣工場技術部に報告されていた。チッソは水俣病が水俣工場の排水に起因することを知っていた。にもかかわらずチッソは、「見舞金契約」に第5条を設けて患者と家族を縛り、低額の金銭の支払いで水俣病事件の終息を図ろうとした。この事実を立証したのが細川の証言にはかならない。彼の証言こそが、熊本地裁をして「見舞金契約」は公序良俗に反して無効と断じさせるのに決定的なもののひとつとなったのである。判決は、「チッソは水俣病の原因が有機水銀であると認識しながら、工場排水を流していたという過失責任がある」と断じた。しかし、細川が生きてこの判決を聞くことはなかった。

長い葛藤の時間を生きながら、死を目前にした彼は、争訟の場での証言によってようやく「会社の人間」から医師、科学者に立ち戻った。自身の証言が「自分で点数をつければ、一〇〇点満点だった」という言葉は、「ネコ400号実験」以来の葛藤と悔恨に終止符を打てた彼の安堵の思いを意味しているだろう。しかし同時に、ひとたび「会社の人間」になってしまったがための結果の重さも、長い葛藤と悔恨の時間の重さも見逃してはならない。なぜなら、「会社の人間」になること、そうした人間でいること、あったことは、その職を去っただけでは解き放たれない桎梏でありつづけているからだ。

有機水銀の副生を報告された技術者も、「ネコ400号実験」の結果を報告された技術者も、長い時間を経てもなお「会社の人間」の言説実践の主体となって産出されつづけている。それは、一企業が、地域社会が、敗戦後日本という国家が追求しつづけてきた「豊かさ」という幾重もの桎梏からは、容易に解き放たれない「会社の人間」の姿なのだ。だとするなら、細川を「会社の人間」から医師、科学者に立ち戻らせたのは、はたして彼ひとりの医師としての良心だけだったのだろうか。あるいは、「医師としての良心」という言葉によって、具体的に彼のどのような経験とその記憶が意味されるのだろうか。

臨床尋問で想起されうる記憶

熊本水俣病第一次訴訟における細川一にたいする臨床尋問そのものの映像による記録はない。そのためか、「水俣」のテレビドキュメンタリーでは、「ネコ400号実験」から細川の臨床尋問を経て熊本地裁判決に至るまでの経緯が、まとまって取り上げられることは少ない。そのようななかで、NHKが2009年1月28日に放送した『その時歴史が動いた わが会社に非あり～水俣病と向き合った医師の葛藤～』（以下、『わが会社に非あり』）は注目されてよい。これが、「ネコ400号実験」と細川の足跡を、ひとつのまとまった番組として取り上げた唯一のものといえるからだ。

この番組は、「その時歴史が動いた」というシリーズ番組のひとつとして制作、放送された。シリーズのいずれの番組も、歴史上の出来事をめぐる記録映像、関係者や研究者の証言にくわえて、

再現ドラマもまじえて構成されている。その点では、ドキュメンタリー・ドラマの性格も備えながら、さらにスタジオでの司会者とゲストとの対談も織り込まれている。全体として見れば、教養番組になっているのがこのシリーズ番組である。

『わが会社に非あり』でも、「水俣」のテレビドキュメンタリーやテレビニュースで多用されてきた患者の症状、工場排水といった記録映像が数多く現れる。それらとともに、他の番組ではあまり見られない細川のノートや臨床尋問で作成された調書の一部を撮影した映像、番組独自の坂東克彦へのインタビューなども現れる。

インタビューで坂東が語ったことに注目してみよう。彼は、細川の証言こそが熊本水俣病第一次訴訟でもっとも重要であったという。チッソは水俣工場の排水が水俣病の原因であると知っていた。にもかかわらず「見舞金契約」で問題の決着を図って排水の垂れ流しをつづけ、工場の生産を拡大させた。坂東は、細川の証言によって立証された事実の重要性をこのように説明するのだった。そして彼は、四国の細川を訪ねて証言を依頼したとき、「(細川は)全然逡巡されなかったですよ、証言に立たれることについて」と語った。

「医師としての良心」が、細川に証言を躊躇わせなかったのはいうまでもない。では、細川の「医師としての良心」とは、彼のどのような経験が思想化されたものと考えればよいだろうか。それを、『わが会社に非あり』の物語を織り成す再現ドラマの映像と音声の流れに見て取ることができる。

この番組の物語は、チッソ附属病院長としての細川の足跡をたどるところから始まる。そこでは、「公式確認」当時は奇病といわれていた水俣病の患者の診療、そして原因究明に、細川がどのように取り組んだのかが描かれ、語られていく。それはもっぱら再現ドラマによってである。ここでとくに注目されるのは、再現ドラマの場面が他の記録映像の場面と接続されたり、再現ドラマの映像と音声に記録映像が重ねられたりしていることである。

細川と同僚医師が進めた水俣病の原因究明の第一歩は、患者発生地域の家庭を一軒一軒訪ね歩き聞き取り調査だった。これを描き語るのは再現ドラマの映像とナレーションの音声である。そこに、調査結果を記録した何冊もの「細川ノート」の映像が挿入される。さらに、ノートに記載された、手書きの表も映像となって映し出される(画像3)。これは患者の多くが漁民や沿岸地域の居住者であることを明らかにしたもので、水俣病の原因究明につながるもっとも基礎的な疫学的知見にほかならない。

たしかに、再現ドラマは、多くの部分が仮構的に制作された映像と音声によって成り立っている。これにたいして、「細川ノート」やその記載の映像は、細川が行った聞き取り調査の結果を事実として表象している。これらの仮構的表象と事象的表象との交錯が、「テキスト相互的シナリオによる推考」(エーコ 2011: 125-129)となって物語的な想像を導く⁽¹⁾。すなわち、細川らが、診察室で水俣病患者に接していただけではなく、患者一人ひとりの生活を直接見聞きしていたことが、事実に基づく推考によって想像されるのだ。

『わが会社に非あり』における細川の臨床尋問をめぐる場面もまた、記録映像と再現ドラマの映

昭和45年7月4日

職業別

| 職業 | 漁業 | 勤人 | 農業 | 漁業 | 大工 | 石切 | その他 |
|-------|----|----|----|----|----|----|-----|
| 職業患者数 | 30 | 8 | 6 | 4 | 2 | 2 | 1 |
| 割合 | 56 | 15 | 11 | 6 | 4 | 4 | 1 |

【画像3】「細川ノート」の記載
 (NHK『その時歴史が動いた わが会社に非あり
 ～水俣病と向き合った医師の葛藤～』より)

像と音声の流れによって構成されている。この場面で最初に現れるのは、1970年7月4日、臨床尋問のために東京の癌研究所付属病院にやってきた数多くの裁判関係者、報道関係者の姿の記録映像である（画像4）。臨床尋問は広範な関心を集め、同日午後7時の『NHKニュース』でも、「ネコの実験で水俣病症状は出ていた、元病院長が病床で証言」のニュースが放送された⁽²⁾。このときの取材映像の一部が、『わが会社に非あり』に引用されたのだろう。末期ガンの患者が入院する東京の病院に、熊本地裁の審理の関係者が訪れたことを記録した映像は、それだけで臨床尋問の重要性を意味するものといってよい。

臨床尋問そのものは、仮構的に制作された再現ドラマの映像と音声によって描かれ、語られてい



【画像4】臨床尋問に向かう裁判の関係者
 (NHK『その時歴史が動いた わが会社に非あり
 ～水俣病と向き合った医師の葛藤～』より)



【画像5】再現ドラマの臨床尋問

(NHK『その時歴史が動いた わが会社に非あり
～水俣病と向き合った医師の葛藤～』より)

く。そこに「細川一証人調書」の手書きの文字が、一行ずつ映像となって重ねられる（画像5）。原告側は坂東が尋問したが、再現ドラマでは、それがナレーションの音声と調書の映像によって語られ、描かれていく。坂東の尋問を仮構的に表象するナレーションの声は、調書の記述に忠実に語られる。

再現ドラマが進行して、ナレーションが「やがて弁護士は、排水を与えて発病した『ネコ400号実験』について問います」と語る。「発病してから、先生、どうなさいましたか」という坂東の問いを語るのもナレーションの声である。細川の答えも同様にナレーションの声が語る。「びっくりしました。それはもう、これは水俣病じゃなかろうかと。これは報告すべきあると考えましたから、私が行きました」。そして、「弁護士の問いは核心へと向かいます」というナレーションにつづけて、坂東の問いが再現される。「そうすると技術部の方も、この四〇〇号の猫については、知っていらっしゃるわけでございますね」。この直後、静止画像が連続してカットインする。病床の患者、漁民の抗議デモのプラカード、胎児性患者の子どもを抱いた父親の画像である（画像6, 7, 8, 9）。つづけて、「細川は長い問いえなかった一言を口にします」とナレーションが語り、細川の声を意味するナレーションが「ええ」と語った。そこに、同じ言葉を記録した調書の映像が重なった（画像10）。

細川の証言は、熊本水俣病第一次訴訟の判決を決定づけるほどに重要であったにもかかわらず、核心部分の応答はあっけない。それに抗うかのように、『わが会社に非あり』の再現ドラマは、臨床尋問の緊張と証言の重さを表象する。「ええ」という発話——坂東の問いと、この応答によって証言は成り立つのだが——に先立つ「細川は長い問いえなかった一言を口にします」というナレーションは、再現ドラマにおける物語的な緊張を意味している。さらに、細川が想起した記憶を意味するものなのかさえも判然としない画像のカットインも、彼の葛藤、悔恨、あるいは証言の重さを物語的に意味する仮構的表象といえるだろう。



【画像6】病床の患者

(NHK『その時歴史が動いた わが会社に非あり
～水俣病と向き合った医師の葛藤～』より)



【画像7】病床の患者

(NHK『その時歴史が動いた わが会社に非あり
～水俣病と向き合った医師の葛藤～』より)



【画像8】漁民の抗議デモのプラカード

(NHK『その時歴史が動いた わが会社に非あり
～水俣病と向き合った医師の葛藤～』より)



【画像9】胎児性患者の子どもを抱いた父親

(NHK『その時歴史が動いた わが会社に非あり
～水俣病と向き合った医師の葛藤～』より)



【画像10】再現ドラマの細川一の証言

(NHK『その時歴史が動いた わが会社に非あり
～水俣病と向き合った医師の葛藤～』より)

しかし、熊本地裁の証人尋問が、東京の病院での臨床尋問として行われたことそれ自体が、すでに証言の重要性を意味する事実である。チッソが「ネコ400号実験」の結果を知らながら隠蔽したことを語ってこなかった細川に、坂東が証言を要請したのも事実である。ネコ400号の水俣病発症によって工場排水が水俣病の原因であることが証明されたのも、「細川ノート」に記録された科学的事実である。そしてまた、細川らが患者発生地域へ足を運んで聞き取り調査を行っていたのも、やはり「細川ノート」にその結果が記録された事実である。『わが会社に非あり』では、これらが、記録映像や証言による事実的表象となって展開していく。

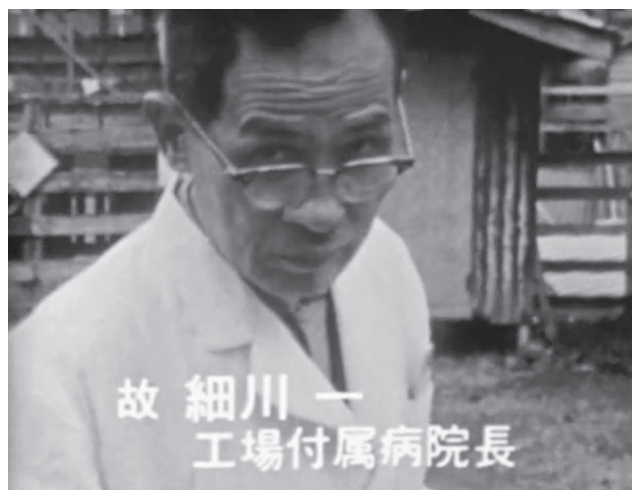
このような仮構的表象と事実的表象との交錯によるテキスト相互的な物語のシナリオによって、何が推考され、想像されるだろうか。細川は、患者発生地域へ足を運んで聞き取り調査を行うことで水俣病の病苦と生活の不安や苦難をつぶさに見聞きしてきた。その記憶こそが、葛藤と悔恨の長い時間に終止符を打ち、医師、科学者に立ち戻って証言すること、言い換えるなら、彼に医師としての良心を貫かせたものの具体的な姿として推考され、想像されるだろう。再現ドラマで細川が「ええ」と語る直前の患者と家族、漁民の抗議行動の画像のカットインは、たしかに仮構的表象である。しかし同時に、カットインされた画像は水俣病事件を記録した事実的表象である。これらの交錯こそが、細川の医師としての良心をかたちづかった経験とその記憶を推考させ、想像させてくれるのだ。

細川は、たしかに「会社病院」の院長ではあったが、水俣病患者から信頼され、慕われる医師だった。石牟礼道子を原作者としてRKB毎日放送が制作し、1970年12月25日に放送されたドキュメンタリー番組『苦海浄土』に、細川と患者とのこうした関係が垣間見られる短い場面がある。それは、患者たちを集めてRKB毎日放送の取材映像を上映し、その映像を見る彼ら、彼女らの様子を撮影した場面である。番組では、これが「RKBニュース・フィルム現地映学会」と名づけられている。

上映された1959年8月の「水俣漁民の抗議すわりみ」の映像には、当時はまだ20代前半で、若い漁民の患者を代表する存在だった浜元二徳の姿が現れる。それを見た患者たちから冷やかされてはにかむ34歳になった浜元の姿などが、この場面に見られる。

映学会では、こうした患者たちにとっては懐かしい「かつて」の映像の流れがつづく。そこに、白衣を着て、鼻眼鏡でカメラに向かう細川の姿が現れる（画像11）。患者たちの間から、「あっ、細川先生」、「細川先生や」、「あっ、メガネかけとらす」といった声や、言葉にはならないが、浜元を冷やかしたのと同じような親しげな声があがる。細川の没後に放送されたため、番組の字幕には「故細川一工場付属病院長」とある。しかし、患者らの服装や番組全体に表象される季節感からすれば、細川の訃報がもたらされる前に撮影された場面かもしれない⁽³⁾。

このようにして、臨床尋問の時期に上映された「かつて」の細川の映像に向かって、「いま」は訴訟の原告となった患者から上がる声は、何を、どのように表象しているのだろうか。それを、1959年当時の「かつて」と1970年当時の「いま」との間に、患者らと細川との間で重ねられてきた、互いを信頼し、慕う関係と考えることができるはずだ。



【画像11】チッソ附属病院長細川一
(RKB毎日放送『苦海浄土』より)

「RKBニュース・フィルム現地映写会」で細川の映像が現れたのは10秒弱にすぎない。この映像と音声の断片をテレビドキュメンタリー・アーカイブによって召喚して、『わが会社に非あり』で、細川が「長い間いえなかった一言」を「ええ」と発話する直前に接続してみよう。そのとき、そこでは、静止画像のカットインとも相俟って、細川が想起しうる、あるいは彼にとってありうる記憶の具体的な姿が想像されるだろう。それは、仮構的なのか、事実的なのかを問うたところでもはや意味のない、しかし事実的で揺るぎのない推考としての想像による記憶なのだ。

水俣病患者と向き合うなかで細川に培われてきたのは、患者一人ひとりの顔や姿、具体的な生活の在り様と結びついた記憶であったにちがいない。それこそが、臨床尋問の「いま」想起され、「かつて」の「会社の人間」をその桎梏から解き放ち、医師、科学者に立ち戻らせたと考えることができるのではないだろうか。

石牟礼道子と細川一

坂東克彦に、四国の細川を訪ねて「細川ノート」を確認するよう依頼したのは石牟礼道子であった。じつは彼女はそれ以前に、まだチッソ附属病院長の職に在りながら帰郷の準備を進めていた細川に、水俣の院長住宅で面会して「細川ノート」を見せられていた。石牟礼は、細川と初めて会ったときのことを、『苦海浄土 第二部——神々の村』でつぎのように書き記している。

細川先生は、大きな蒼味をおびた、つよい光をたたえた眸をしたお方だった。その光にわたしはうたれた。あとにもさきにも、このような眸の光に逢ったことがなかった。それは言葉にならぬ叡知とでもいおうか、かりにたくさんの言葉をおっしゃられたにしても、なお深々とした叡知の湖（うみ）が、眸の底に大きく湛えられ、それが言葉を超えて光をはなっているよう

だった（石牟礼 2006: 290-291）。

初めての邂逅で細川に魅入られてしまった石牟礼だが、面会のそもそもの用向きは、水俣病にかんする医学的な教示を乞うことにあった。しかし、医学の予備知識もないまま、何を、どう尋ねたらよいのか途方にくれる彼女を待たせて、細川は分厚い資料を持ち出してきて前に置く。ますます当惑する石牟礼に、細川は微笑して語りかけた。「誰だって、はじめはそうですから、小さなことから、だんだんはじめればよいのです。僕にわかることでしたら、何でもご協力いたします。お役に立つことでしたら、全部すべてお教えいたします」（同上 291）。

眼差しの深さに引き込まれながら、尋ねる言葉も覚束ないまま当惑しているところに、これを読めとばかりに積み上げられたのが「細川ノート」だった。しかし、「まだ若かった一主婦」（同上 292）の石牟礼に、のちに裁判の帰趨を決する証拠になる記録の重要性など、ただちに分かるはずもない。ますます当惑しているところに、さらに思慮のある言葉をかけられれば、石牟礼ならずとも、眼差しばかりかその人柄に引き込まれてしまっても無理もない。ところが、それを断ち切るかのように、細川は「長い間いえなかった」であろう重大なことを彼女に告げたのだ。

これは大事なことですけれども、僕なりに、若い先生方と協力しまして、病状の原因をですね、できるだけはっきりさせようと思ひまして、研究しておりましたんです。責任がございまずからね。ネコをたくさん飼ひましてね、この病院で。熊大の研究とも平行した形でしたが、結果がはっきりと出ましたんです。僕らの方でも、廃水がね、原因ということですね。（同上 291-292）。

石牟礼は、「ハレーションを起こしているような心理の状態で、それを聞いていた」（同上 292）という。細川が「これは大事なこと」といったのが、患者の聞き取り調査から「ネコ400号実験」に至る研究で明らかになった水俣病の原因、それを解明した自身の責任、そしてチッソの責任であることはいまでもない。石牟礼と細川との最初の面会は、細川がまだ病院長の職に在りながら帰郷を準備していた時期であるから、「ネコ400号実験」の2年後の頃だろうか。その間彼は、「ネコ400号実験」が明らかにした水俣病の原因、その隠蔽を許してしまった「会社の人間」としてみずからの責任、みずからを縛る「会社」の責任を語るべき相手を待ち焦がれていたのかもしれない。はからずもそれに応えたのが石牟礼だった。彼女は、ハレーションを起こしながら聞いた細川の言葉を、「思えばこの時先生は、初対面の人間に、ご自分の決意を、なにげなさそうな静かな口調で語られた」（同上）と述懐している。

「細川ノート」の重要性は宇井純によって確認され、石牟礼もまた、細川宅でこのノートを確認するよう坂東に要請している。こうした経過をたどって、熊本水俣病第一次訴訟における重要な証言が細川に求められることになった。しかし、石牟礼と細川の間には、裁判での証言を要請したり、されたりするとか、「信頼関係」などという言葉だけでは尽くせないつながりが生まれていた。

石牟礼は、細川の眸の光をさらにつぎのように語っている。

お言葉もさることながら、あの湖のような眸の色がわたしを導いていた。外にはあらわれぬ剛毅さをひそめたその光は、人類が意識を持ちはじめた頃から、自分自身を読み解こうと希求しつづけてきた眸の色におもわれた。チッソ工場附属病院長細川一という真摯な、運命的な人の眼において、その意識は光を点ぜられたのだとわたしには思われた（同上 292-293）。

細川の眸の光にこのような意味を見て取る石牟礼は、その後何度か面会を重ねた。彼が東京の癌研究所付属病院に入院して、臨床尋問が日程にのぼるようになると、石牟礼は「先生におめにかかりに行かなければならなかった」（石牟礼 2004a: 46）と思い詰めたように上京している。しかし、「裁判のための証言のお願いなど、先生よりもわたくし自身の方が耐えがたいこと」（同上）であった。そのような思いの石牟礼と、病床の細川との間で交わされた言葉、それによって二人の間に想起されうる記憶、ありうる記憶が、彼女の作品となってつぎのように綴られていく。

静かに、呼吸をしずめるようにして先生は話された。

「——あの子どもたち……ずいぶん、大きくなったでしょうね。どうしていますかしら……」

あの子たち、とは、先生のノート（わたくしたちはそれを細川ノートと呼んでいた）のカルテの中に生き残っている、胎児性水俣病の子たちのことである。

——元気になっています——

といえば、そらぞらしい。すぐに先生は気がつかれて、涙が、仰臥されている目にふくらんだ。

「おおきく、なりました」

わたくしはそうに申しあげる。

（中略）

昭和三十一年八月、第一回厚生省への報告書のカルテに記入されている患者三十四名のうち、すでに死亡していたもの、十三名。

（中略）

いかような死と、生のすがたであったのか、たぶんまなうらに灼（や）きついているにちがない（同上 46-47）。

もとより、石牟礼の作品はルポルタージュでもなければ、しばしば誤解されるような（曲解といってもよいのだが）記録文学でもない。副題を「聞き書き」としているにもかかわらず、「だって、あの人が心の中で言っていることを文字にすると、あなるんだもの」（渡辺 1972: 371）という想像を綴ったのが彼女の作品である。しかしその作品は、記録文学と見まがうほどの透徹した観察と、それに密接に結びついた、深く、豊かな想像の所産である。そこでは、たんなる空想や絵空事など

ではなく、精緻に観察された事実に基づくありうる想像的世界が語られているのである⁽⁴⁾。

眸の蒼い光と、その意味としての叡知、剛毅、自分自身を読み解こうとする人類史的な希求とは、その人の相貌や佇まいへの研ぎ澄まされた観察によって想像された、眸の光のありうる意味である。胎児性患者の子どもたちは「ずいぶん、大きくなったでしょうね。どうしていますかしら」と問う言葉も、目にふくらむ涙も、精緻な観察によってのみ書き記される。そしてそこに想起されうる記憶、ありうる記憶が、「いかような死と、生のすがたであったのか、たぶんまなうらに灼きついているにちがいない」と、長い時間のなかで経験された事実とともに想像的に語られているのだ。

石牟礼の作品のこのような叙述は、『わが会社に非あり』の臨床尋問の再現ドラマで、細川が「ええ」と語る直前に水俣病患者の静止画像がカットインする仮構的表象を彷彿とさせる。逆に、テレビ番組の再現ドラマを、石牟礼の作品のなかの病床の細川との面会の場面の可視的な表象と見ることさえできる。いずれにしても、石牟礼の文学作品にも、仮構的表象と事実的表象の交錯によって推想的に想像される、想起されうる記憶、ありうる記憶の物語が紡ぎ出されているのだ。石牟礼が病床の細川の涙に想像したのは、葛藤と悔恨の時間のなかで「水俣」の苦難に向き合いつづけることによってのみ想起されうる記憶の物語といてよい。これこそが、「歴史への真摯さ」⁽⁵⁾に向かおうとする石牟礼と細川による、人間の条件としての「水俣」の記憶の物語にほかならない。

4. 猫と暮らした記憶の物語

実験ネコをめぐる記憶が紡ぐ物語

ここまで、「記録としてのモノ」となって展示された「ネコ実験の小屋」を見る体験を端緒として、想起されうる「水俣」の記憶を考察してきた。それは、水俣病事件研究の成果はもとより、証言やテレビドキュメンタリー・アーカイブ、あるいは文学作品が、相互に作用しながら想起しうる記憶を探索する試みであった。見えてきたのは、熊本水俣病第一次訴訟判決を決定づけるほどに重要な「ネコ400号実験」の結果とその隠蔽という出来事をめぐる、いくつものありうる「水俣」の記憶である。ここでもうひとつ考えておかなければならないのは、「ネコ実験の小屋」で飼育されていた実験ネコによって想起される記憶である。そこからは、実験動物になった猫こそが想起させる、いわば「水俣」に固有の記憶とその物語が紡ぎ出されるだろう。

「公式確認」の数年前から、水俣の漁村では猫の異変が頻発していた。猫が痙攣してギリギリ舞い踊り、涎を垂らしながらよろよろと歩き、集落の飼い猫が全滅してしまうという不気味な異変である。ほどなく、同じ異変が猫とともに暮らしていた人びとを襲った。

猫の異変が人びとの水俣病発症の予兆であったことから、水俣病の医学研究では実験動物として猫が多用された。動物実験は、チッソ附属病院だけではなく、熊本大学医学部、水俣保健所などでも行われている。生活環境のなかで水俣病を発症した猫（「自然発症ネコ」などと矛盾に充ちたよび方もされた）、実験によって発症した実験ネコ、そして水俣病患者の病理所見の検証によって水俣病の原因と病因物質の究明が進められたのである。こうして、人びとの暮らしに近しく生きるは



【画像12】 チッソ附属病院の水俣病動物実験室の内部
(RKB毎日放送『苦海浄土』より)

ずの猫が、名前も与えられずに番号でよばれる実験ネコとなって、その身体と生を動物実験に供したのだ。

水俣病を発症した実験ネコの映像が撮影され、記録され、医学研究の資料となっていった。それが、テレビドキュメンタリー、テレビニュース、ドキュメンタリー映画に数多く引用されていく。このような映像に向けられる眼差しには、痛ましさといった意味が一瞬生起することがあっても、結局のところは、実験ネコとしてその姿が見られてしまう。今日でも、痙攣して舞い踊ったり、よろよろと歩いたりする実験ネコの映像は、広く共有された水俣病事件の集合的記憶でありつづけている。

しかし、病苦と生活苦を余儀なくされた患者が、ともに暮らすはずの猫の苦悶する姿を目の当たりにしたとき、そこに生起する意味も、想起される記憶も、おのずから異なったものになるだろう。それを想像させる映像と音声の流れが、ドキュメンタリー番組『苦海浄土』のなかの「RKBニュース・フィルム現地映写会」の場面に見出される。

映写会では、「かつて」チッソ附属病院にあった「水俣病動物実験室」の内部と実験ネコの映像も現れていた（画像12）。患者たちは、「水俣病動物実験室」と書かれた看板の映像を見ることで、それが何かようやく分かったようだ。動物実験室がチッソ附属病院の施設であることに気づいた浜元二徳が、驚きの表情で「会社病院だがな、こりゃ」、「ネコ実験しとるがな」と声をあげる。他の患者たちも、檻のなかの実験ネコの映像に言葉にならない驚きの声をあげる。さらに浜元が、「ほりゃ、水俣病になった」という。それにつづけて、水俣病を発症した実験ネコを見る患者たちの、驚きと痛ましさがなくなってきた表情の映像が現れる（画像13）。このようにして「かつて」の実験ネコの映像を、1970年当時には訴訟原告となってチッソの責任を問うている患者たちが見たとき、そこにどのような記憶が想起されるだろうか。



【画像13】発症した実験ネコの映像を見る患者
(RKB毎日放送『苦海浄土』より)

水俣の漁村で人びととともに暮らしていた猫の異変は、踊り狂う身体と失われる生によって告知された水俣病の予兆であった。不安な日々がつづくなかで、同様の異変が人びとの身体にも現れ、病苦と生活苦に襲われる。この忌まわしい病の原因と責任を負うべき者を究明しようとしたとき、人びとと近しく暮らすはずの猫が、名前もない実験ネコとなっていく。

実験によって水俣病を発症して踊り狂い、悶え苦しむ実験ネコの映像は、「かつて」とともに暮らしながら、この病の予兆となって命果てた猫の記憶を患者に想起させるかもしれない。それはまた、病苦と生活苦に身悶えしつづけてきた患者の記憶を想起させるかもしれない。「かつて」水俣病の予兆を告げていた猫が、今度は実験ネコとなってその身体と生を供して、病苦の原因と生活苦の責任を負うべき者を告げようとする。これもまた、実験ネコの映像を見る患者たちの記憶になりうるかもしれない。実験ネコを見る痛ましさの表情には、このような「水俣」のありうる記憶が推考され、想像されるだろう。

「かつて」はチッソ附属病院にあって、「いま」は水俣病歴史考証館で「記録としてのモノ」となって展示されている「ネコ実験の小屋」であるが、水俣病「公式確認」後30年の1986年には異なる場所で展示されていた。それは、患者と支援者が企画して開催された「水俣病30年記念行事 水俣病資料展」においてである。そのとき展示されていた「ネコ実験の小屋」を、KKT熊本県民テレビが制作し、1986年7月20日に放送されたドキュメンタリー番組『苦海からの叫び～水俣病30年～』に見ることができる（画像14）。

資料展では、「ネコの飼育小屋」と名づけられていた「ネコ実験の小屋」には、手書きの文字でつぎのような説明が掲げられている。「昭和34～35年、チッソ付属病院で水俣病のネコ実験に使われたネコの小屋。飼育数約1000匹。水俣病で狂死したネコの御霊をここに祀る」。この言葉どおりに、「ネコの飼育小屋」の前には、「研究用犠牲猫族之霊位」と書かれた位牌も置かれていた（画像15）。



【画像14】「水俣病30年記念行事 水俣病資料展」に展示された「ネコの飼育小屋」
(KKT熊本県民テレビ『苦海からの叫び～水俣病30年～』より)



【画像15】「ネコの飼育小屋」の前に置かれた位牌
(KKT熊本県民テレビ『苦海からの叫び～水俣病30年～』より)

たしかに、動物実験施設のかたわらに実験動物の慰霊碑が建立されていたり、死んだペットの位牌が作られたりすることは少なくない。しかし、「水俣」では実験動物となった猫にこそ、位牌を作ってまで御霊が祀られなければならなかった。猫が実験動物にさせられたのは、人びととともに暮らしていた猫が身体と生を賭して水俣病の予兆を体現し、その後、猫とともに暮らしていた人びとも同じ異変が現れたからである。さらに、御霊が祀られる実験ネコもまた、身体と生を賭して、ともに暮らしていた人びとの苦難の原因と責任を明らかにしようとしたからなのだ。

これこそが、実験ネコに向けられる患者の痛ましき表情と、「ネコ実験の小屋」の来歴を推考することで想像される、「水俣」の猫をめぐる記憶の物語にほかならない。そこでは、悶え苦しむ実験ネコの姿によって想起されうる記憶が、人びとと猫が近しく暮らしていた日々が根底から壊されていった「水俣」の歴史となって語られていくのである。

猫に導かれて

「かつて」、「水俣」では、人びとが猫とともに暮らす日々があった。どこからともなくやってきて、いつの間にか住みついたり、知人から分けもらったりした猫と、人びとは日々の時間と空間をとともにして過ごしていた。気ままに生きて、言葉が交わせなくても、寝食のかたわらで見え隠れする猫は、何かにつけ、さりげないやりとりがなされる家族の一員ようになって人びととともに生きていた。石牟礼道子は、このようにして猫と過ごした日々の記憶を、さまざまに綴っている。

彼女が育った水俣の家では、祖母、両親、弟がともに暮らしていた。「おもかさま」とよばれた祖母は、夫の放埒な生活に心を痛めつづけ、盲目の狂人となっていた。おもかさまは、しばしば街中をさまよい歩き、気づいた近隣からの知らせで迎えに行き連れ帰るのが幼いころの石牟礼の役目だった。盲目で言葉も通わぬ祖母を、心の交感を頼りに「こうまか駄で手引きの綱」となって、「押したり引いたりして」（石牟礼 2017: 15）家路についたのが、彼女の幼い日の記憶である。

おもかさまも一緒に、家族はそろって食事をする。いつも、そこには猫の姿があった。おもかさまは別膳だったが、不自由な箸から飯粒や焼魚の身がこぼれ落ちるので、それを拾いながら食事を終えるまでついていてやるのが、幼い石牟礼と、そして猫だったという（石牟礼 2004b: 155）。ある日、そのようないつもと変わらない食事時に「事件」が起きた。飼い猫のミーが、ぬき足さし足でおもかさまの膳に近づいて、「片手を差し出すやいなや、ぱくりと鰯を啜えた」（石牟礼 2017: 197）のだ。

その瞬間、父の手が延びてきてミーの首筋をつかみ、鼻を畳にすりつけた。凄みをおびた声で、

「こらあーっ、お前ゃその卑しか盗人腰は何か！ 食わせんばし（食わせずにでも）おるか。お前が猫じゃからというて、差別したことがあるか。何ちゅう、卑しか根性の猫ぞ。めくら様とあなどって手を出したな。その魚はお前にくれてやる。たった今、その魚啜えて、この家から出てゆけ」

父はそうやってミーをつき放した。ドスの利いた声だった。わたしは六つ、弟は五つだったか、気迫に圧倒されて座り直した。

「めくら様の皿に手を出したな。なんちゅう卑しい精神ぞ。このアホが」

ミーは射すくめられたように小さくなっていたが、そろりと逃げ出そうとした。

「お前が生んだ仔猫は、うちで養のうてやる。ひとりで出てゆけ」

ミーは二、三步足を動かして、よろよろと逃げ出した（同上）⁽⁶⁾。

石牟礼は、このときの父の叱責の言葉と声を今でも忘れないとつづけて書き記している。「盗人腰」という言葉も一度で覚えたという。ミーは出て行かなかったが、しばらくは父の姿を見ると固まっていた。「仔猫たちは母猫の姿を見てそうなったのか、めくら様の皿には手を出さなかった」(同上 197-198)。

石牟礼の透徹した緻密な観察によってのみ語られる、猫とともに暮らす日々で起きた「事件」の記憶である。だからこそ、人びとが猫とともに日々を過ごしていた暮らしの、想起されうる記憶、ありうる記憶の物語が、このように紡ぎ出されているといえるだろう。言葉の通わぬ猫であっても、むしろ言葉が通わないからこそ、心を交感させてともに生きていこうとする。それが、猫だけではなく、魂のさすらう「めくら様」のおもかさまでも、そして海山の生きものとも、ともに暮らす人びとの身体と生なのだ。そこからは、「かつて」の「水俣」で猫とともに暮らしていた人びとが経験したさまざまな出来事の記憶の物語が生み出されるにちがいない。

おそらく、「水俣」にかぎらず、人びとが猫とともに暮らしていた日々には、多少の異同はあったにせよ、よく似た出来事はあって、それをめぐって想起されうるさまざまな記憶もありうるのだろう。しかし、人びとが猫とともに暮らしていた日々が根底から壊されていった記憶の物語が「水俣」の歴史になっていったことを、けっして見逃してはならない。この底知れぬ苦難の歴史の物語が、猫の異変の記憶から紡ぎ出されていくことは、もはやいうまでもない。

やはり石牟礼も、猫とともに暮らす人びとの記憶の物語として、「水俣」の猫の異変を書き記している。飼猫のミーが引き起こした事件は、「説教」と題された短いエッセイで語られているのだが、じつはこの述懐は、祖父が聞き及んだ猫の異変の噂話につづけて記されたものなのだ。

妻を発狂させるほどに放埒な生活をしていた石牟礼の祖父は、趣味で釣舟をもっていた。彼は沖に出かけては漁師と懇意になり、家で生まれた「仔猫を舟に乗せて行ってさしあげるのが、ならいになっていた」。ところが、漁師に贈った猫がつぎつぎに死んで、さっぱり育たなくなる。漁村では、鼠が漁網をかじるのを防ぐために、どの家も猫を飼っていた。しかし、「猫踊り病」が流行って猫がいなくなって鼠が増え、猫の狂死が不吉な話題となって囁かれるようになったのである(同上 195)。

漁村地帯の猫の鼻は「赤むけ」になっているそうだという噂がまず広がった。鼻を地面につけて逆立ちし、ギリギリまわり、海に突進して死ぬとは、どういうことかとわたしの家でも話し合っていた。猫をくれといわれてもさしあげる気になれず、わたしは噂のある村落へ出かけることにした。ある家の前に、おじいさんがいらっしゃって孫の守をされていた。見られない漁具がいろいろ干してあった。その漁具のことをおたずねしているうちに、猫の話になった。

「じつは、うちでも猫が次々死んで困るとる」と、おじいさんはおっしゃった。あんたはどこから来たのかと逆質問され、「じつは、人間も狂い死にしよう」とおっしゃったのである。その一言でわたしは水俣病に深入りすることになった(同上 195-196)。

ミーの「事件」の記憶があったればこそ、仔猫の行く末が案じられ、不安に衝き動かされるようにして、彼女は水俣の漁村を訪れたのだろう。そこでは、猫が悶え苦しんで命果て、猫とともに暮らす人びとも同じように苦しみ命果て、病苦と生活苦に喘いでいた。「水俣」の人びとが猫とともに暮らしてきた日々が根底から破壊されていく記憶は、彼女を「水俣病に深入り」させ、生涯想起されつづけた。そして彼女は、この記憶の物語を幾度となく語り、綴ることで、それを「水俣」の歴史にしていって⁷⁾。絶筆となった2018年1月31日の朝日新聞掲載のエッセイ「明け方の夢」は、人びととともに暮らす猫の狂死の記憶を書き記して結ばれたのだった。

かつては不知火海の沖に浮かべた舟同士で、魚や猫のやり取りをする付き合いがあった。ねずみがかじらぬよう漁網の番をする猫は、漁村の欠かせぬ一員。釣りが好きだった祖父の松太郎も仔猫を舟に乗せ、水俣の漁村からやって来る漁師さんたちに、舟縁越しに手渡していたのだった。

ところが、昭和三十年代の初めごろから、海辺の猫たちが「狂い死にする」という噂が聞こえてきた。地面に鼻で逆立ちしてきりきり回り、最後は海に飛び込んでしまうのだという。死期を悟った猫が人に知られずに姿を消すことを、土地では「猫嶽（ねこだけ）に登る」と言い慣わしてきた。そんな恥じらいを知る生きものにとって、「狂い死に」とはあまりにむごい最期である。

さし上げた仔猫たちが気がかりで、わたしは家の仕事の都合をつけては漁村を訪ね歩くようになった。猫にさそわれるまま、のちに水俣病と呼ばれる事件の水端（みずはな）に立ち合っていたのだ（石牟礼 2018a: 235-236）。

言葉にして語りえぬ苦難、交わす言葉のない者、言葉を奪われた者の苦難から眼を背け、打ち棄てていくことで、この国は「豊かさ」に向けて邁進してきた。この歴史を問おうとしたとき、「水俣」のさまざまな言葉が生み出された。田中優子は、「文学、とりわけ小説の役割として、片づけられてしまったものを呼び出し、その中に生きていた人たちに再来してもらって紙の上でもう一度生きてもらう、ということがある」（田中 2020: 114）と述べている。「水俣」をめぐる文学、そしてさらに映像、音声、あるいは「記録としてモノ」の数々は、言葉を語りえず、言葉を交わせず、あるいは語りうる言葉もないまま命果てた者たちの記憶を、「いま」、「ここ」に呼び出そうとしている。賢しらにその虚実や真偽を弄ぶのではなく、それらに眼を凝らし、耳を澄ませ、想起される記憶、ありうる記憶の物語を紡ぎ出していく。それが、「かつて」人びとと近しく暮らしていた猫たち、御霊が祀られた猫たちの「いま」の願いではないだろうか。

【註】

- (1) U・エーコは、つぎのように述べている。「いかなるテキストも、読者が他のテキストについてもつ経

験から独立に読まれはしない」(エーコ 2011: 125)。

- (2) NHKアーカイブスには、このニュース項目の放送記録は残されているが、ニュース番組は保存されていない。
- (3) 東プロダクションのドキュメンタリー映画『水俣』のラッシュが行われていた浜元フミヨの家に細川一の訃報がもたらされたとき、そこに石牟礼道子も居合わせていた。彼女は、そのときの様子を、作品『苦海浄土 第三部 天の魚』でつぎのように記している。「細川先生が息をひきとられたというお電話を受けたとき、スタッフたちも浜元フミヨさんも、顔を見合わせ、ながい間、誰も声を発しなかった。受話器をかけ忘れたまま握っていたわたくしは、心がずんずん沈んでゆき、湖沼の底にかすかな濁りを立てて横たわった。それがしずまったあと、どこへもとどかぬ小さな石の声にわたくしはなった」。「それからまた長い時間がすぎ、みんな黙ったまま映画のラッシュは続き、映像に再生され写されている水俣の海は、沈んでゆく光芒を発していた」(石牟礼 2004a: 42-44)。
- (4) 田中優子は、石牟礼の作品『苦海浄土』の成り立ちとその優れた特徴を、つぎのように読み解いている。「医学用語を使ったルポルタージュでありながら、患者の心の中の言葉を聞き取ったなかばフィクションでもあり、標準語書き言葉による客観的な描写でありながら、天草・水俣方言による話し言葉でもある。いくつも二重性が重なり合いながら『苦海浄土』はこの世に立ちあらわれた」(田中 2020: 15)。
- (5) historical truthfulnessを和訳した「歴史への真摯さ」とは、T・モーリス＝スズキが著書『過去は死なない——メディア・記憶・歴史』で提起する、理念的な性格すら帯びた重要な概念である。彼女はこれを、つぎのように説明している。「“真実(トゥルース)”ではなく“真摯さ(トゥルースフルネス)”ということばを使うことでわたしはこの論考を、歴史的事実が存在する、しない、をめぐる、ときには不毛とさえ思える論争から切り離し、現在の人びとが過去を理解するプロセスに焦点をあてたいと願っている」(モーリス＝スズキ 2014: 36)。
- (6) この「事件」の記憶は、石牟礼の幼い日の記憶を綴った作品『椿の海の記』でも語られている。しかしそこでは、父亀太郎の叱責はもう少し穏やかで、説論に近い。エッセイとは異なる小説としての作品全体の物語では、石牟礼にとってのおもかさの記憶が重要な位置を占めているからだろう。亀太郎はミーの首筋をつかんだり、鼻を畳にすりつけたりはせず、「膝でにじり寄って叱りつけ、尻を押しや」っている。母春乃がミーの尻尾をたたいたのを感じ取ったおもかさだが、「畜生ば打ったりすなえ」と気の毒そうにいうと、ミーにも「家中の気配は察しられるものとみえ、猫だといえどもばつが悪くてたまらぬ目つきになって、しょぼり、しょぼりとしているのだった」(石牟礼 2004b: 155-156)。
- (7) 石牟礼は、この猫の異変の記憶を、さまざまな場面で語っている。2010年の講演で語ったときには、水俣市茂道を訪れたこと、そこで出会ったのが、杉本栄子の父進であったことを明かしている(石牟礼 2018b: 138-141)。また、NHKが2012年2月26日に放送したドキュメンタリー番組『花を奉る 石牟礼道子』(「ETV特集」)でも、「茂道や月浦の猫たちは、鼻の頭がチョロッ剥げとるって噂が聞こえてきた」と語っている。

【引用文献】

坂東克彦(2005)「過ちを三たび繰り返さないために」原田正純編著『水俣学講義 第2集』日本評論社

エーコ・U (2011) 篠原資明訳『物語における読者 [新版]』青土社

原田正純 (1972) 『水俣病』岩波新書

石牟礼道子 (2004a) 『苦海浄土 第三部 天の魚』(『石牟礼道子全集 不知火 第三巻』所収) 藤原書店

———— (2004b) 『椿の海の記』(『石牟礼道子全集 不知火 第四巻』所収) 藤原書店

———— (2006) 『苦海浄土 第二部 神々の村』藤原書店

———— (2017) 『花びら供養』平凡社

———— (2018a) 『魂の秘境から』朝日新聞出版

———— (2018b) 『綾蝶の記』平凡社

宮澤信雄 (1997) 『水俣病事件四十年』葦書房

モーリス＝スズキ・T (2014) 田代泰子訳『過去は死なない——メディア・記憶・歴史』岩波現代文庫。

田中優子 (2020) 『苦海・浄土・日本——石牟礼道子 もだえ神の精神』集英社新書

渡辺京二 (1972) 「石牟礼道子の世界」(石牟礼道子 (2004) 『新装版 苦海浄土——わが水俣病』講談社文庫
所収)